遺物の復元 一形をつくる一

http://www.kyoto-arc.or.jp

(財) 京都市埋蔵文化財研究所·京都市考古資料館



破片の状態 博物館・資料館などの展示や写 真撮影に使われている土器などの 遺物で、完全な形をしたもののう ち、多くは復元が施されている。 実のところ、発掘調査によって出 土する遺物は、ほとんどが破片の 状態なのである。見慣れた人なら、 土器などの破片からある程度の種 類や形は判断することができるの だが、それだけでは全体がどんな 形になっているのかとか、窯で焼 いた際の焼き歪みによって形がど れほど変形されているのかなど、 形状の上でもはっきりしたことが わかりにくい。そこで土器の破片 から、本来あったであろう土器の 姿に戻すという作業が必要になっ

調査で出てきた土器などの破片 は水洗いし、いくつもの同じよう なものや異なるものがいっぱい混

てくる。



接合のすんだ状態

ざり合っている中から、土質や色 調・厚み・表面の成形痕や仕上げ の手法・文様などの特徴を参考に して、破片を同じ個体どうしに分 けていき、そして、また同じ個体 内で部位別に分け整理していく。 次にそれを接着剤を使用して、ジ グソーパズルをするようにつけて いく。できるかぎり接合をして、 破片の足りない部分については、 石膏という材料を用いて復元をす

石膏復元に使う石膏(歯科用石 水で溶かすと初めはミルク状から クリーム状に、徐々に固まってい 質をもつもので、強度も高い。こ れを遺物の足りない部分に入れて 補っていく。

作業の段取りとして石膏を入れ



石膏復元の出来上がり

る前に、その石膏を受け入れる型 がいる。型は、粘土(陶土)を板 状にして適度な大きさにカットし て、石膏を入れようとする部分の 内側から形を整えてあてがう。

石膏の入れ方としては, 基本的 には土器の欠けた部分の周囲から 全体へと入れていき、必要なとこ ろまで石膏を盛る。

石膏が凝固したら、小刀などの 道具を使って石膏を削って仕上げ ていく。削りは土器の実測図やそ の土器全体の特徴を考察して、全 膏)とは、白い粒子の細かい材料で、 体的に形が一体化するように仕上 げる。

このようにして石膏復元された く。5~10分間で完全に固まる性 土器に彩色をすることで、それが 使われていたのであろう当時の姿 により近いものとして、私たちが 目にすることができるのである。

(多田清治・村上 勉)

須恵器高杯の石膏復原











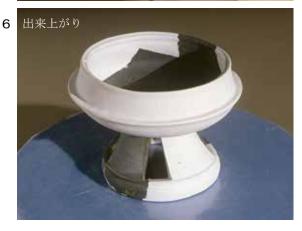


写真 1 高杯の口縁と同じ大きさの円形の台紙を、まず用意する。粘土で内型を作るには、実際に残っているところから足りない部分とよく似ている内側を探し、そこに粘土板を押しあてて型を取る。

写真2 口縁台紙を手回し口クロのビニールの下の中心に置き、粘土の内型を口縁台紙に合わせて置く。高杯を石膏で汚してしまわないために、汚れそうなところに水に浴かした粘土を塗っておく。そして高杯を台紙と粘土内型とに合わせて置き、位置を細かく調整する。石膏が流れださないように、粘土の帯を台紙の外側に平行に置く。

写真3 石膏を溶き、周辺から内型部分へと入れ込んで

いき、心要なところまで盛る。そして余分な石膏を、 まだ軟らかな状態の時に取り除いておく。

写真4 残っている部分の特徴や焼き歪みによる 変形を考察しながら、いろいろな小刀類を使つて、 八分程度の仕上げの削りをする。

写真5 細部の仕上げ削りは、残っている部分の 成形痕や文様などを考察したり、実測図を参考に して、全体的な形が一体化するようにする。

写真6 補修するところがあればその部分に石膏を入れて直す。そして耐水ベーバーで磨いて仕上げ、土器についた汚れを落として、乾燥させて石膏復元の過程を終える。